

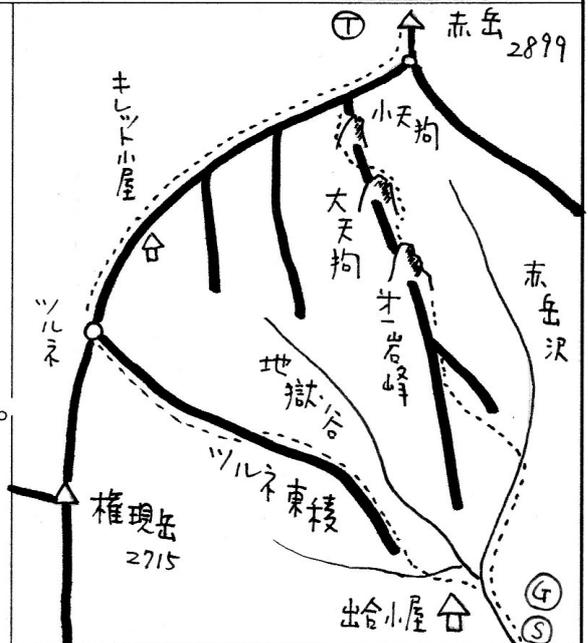
山行報告書

通算山行NO	NO・138S	報告者	奥山 美保	
年月日	'98年11月22日(日曜日)～	年月日(曜日)		
山行名	冬山訓練・2	天候	晴れ	
山名	八ヶ岳 赤岳・天狗尾根 (2,899 m)			
この山のセールスポイント	<b>美しい霧氷と新雪の赤岳が素晴らしい!</b>			
コース 及び タイム	起床3:00～林道終点5:10/5:20 ～出合小屋6:30～天狗尾根取付7:00～縦走路 11:45 ～赤岳山頂12:25 ～キレット小屋13:45 ～ツルネ14:25 ～出合小屋 15:55/16:20 ～林道終点17:20 →裾野			
標高差	△S 1690 ～T 2899 ㊦ 1209 m	体力度	1・2・3・④・5・6	
	▼T ～G m	技術度	1・2・3・④・5・6	
走行距離	～ = km	展望度	1・2・3・4・⑤・6	
参加者	CL 後藤 隆 51	赤岳10名登頂だぁ～	小田嶋 49	天狗尾根グッド。四頭筋ガガ
	SL 加藤 紘 49	雪はやっぱりサイコー!	船橋 49	昨夜の酒が残って辛かった
	嗣 八代 62	さすが天狗。厳しい!	鮎 27	満足感。充実感でいっぱい!
会員 6名 ・ 一般 名 ・ 合計 6名				

真っ暗な中、BCを車で出発する。美し森の脇の林道を奥へ入って行く。が段々と道幅は狭くなり荒れてきた。四駆でなければとても無理な道である。という道を加藤さんは、他人の車でガンガン登っていく。『すごいなぁ～この人』と思って見とれているうちに、どうやら道も無くなり終点?のようである。車を止め、いざ出発!

空は満天の星。オリオン座がとても近くに見えた。因に気温は-8度。ヘッドランプをつけ河原を歩きます。石がゴツゴツして歩きにくい、皆さんヒョイヒョイ登っていく。私は親の後を追うカルガモの様に必死である。暫く歩くと周りが薄明るくなってきた。振り返ると遠くに甲府盆地がうっすらと見える。朝もやに朝日があたってきれいだった。どうやらお天気は良さそうである。

ふと前方を見ると、白く輝く山々が見えた。『あ～今からあれに登るんだなぁ～』と思ったらなんだか一段と緊張してきた。『今行くから待ってろよ』と言ってやりたかったが、どうぞお手柔らかにお願いします、と心の中で頭を下げた。堰堤を幾つも越える。結構曲者でちょっと大変。そうこうしているうちに、河原の幅が少しずつ狭くなってきた。水の音も何となく聞こえてくるようになった。1時間程で出合小屋到着。人が何人かいたようだ。何か変だけど人がいる(人に会う)事にちょっと吃驚した。昨夜泊まったようだ。CLが『天狗ですか?』と



新人とザイルで登る 霧氷山

聞くと『イヤ。この辺を散歩です』と答えた。

河原を左に折れて天狗尾根に取りつく。道があると言われればあるような、ないような・・・。どうして此処が道ってわかるの？う～ん。CLも凄い人だなぁ～と思った。が感心している場合ではなく急登である。しかも道は（私に言わせれば）ナイ！取敢えず必死について行くという感じである。先頭をCL、その後を高岡さん、小田さん。そして加藤さん、私、しんがりをややアルコールが身体に残っている堀合さんの順で進んで行く。途中でアイゼン・ハーネス装着。積雪は数センチといったところだろうか。木々には霧氷がびっしりである。青い空に霧氷のついた真っ白な木々が映えてとても綺麗だった。もう既に『来て良かった』と感激してしまったが、此の先の事を考えると『来ちゃって良かったのか？』という気持ちになった。

途中、CLのグループと離れてしまい足跡を見失った。足跡らしきものはあるが、アイゼンをつけていないものである。道らしきものは、相変わらずないが木に古ぼけたリボンがついているので道なのか？『お～い』と呼びかけたり、笛を吹いてみる。と右の方から何となく返事が聞こえた。加藤さんは動揺せず、左右上下の様子で進路を即決。『ここを直登。藪漕ぎ覚悟此処ってどこ？『ここ』という所はハイマツ帯で地面を這って行かなければとても通れない。その藪の中を加藤さんがガンガン進み始める。やっぱり凄いなァ～この人・・・。その後を必死でついていく。藪漕ぎ初体験である。これが藪漕ぎかぁ～と悠長に考えている余裕はなかった。とにかく必死。暫く歩くと無事CLのグループと合流。ここで合羽を着る。

最初の岩峰が見えてきた。張り出した大きな岩の下はパツクリ口を開けた谷底だ。舌舐りをして待っているようだった。CLがザイルを出し高岡さん・小田さんとセッティング。気後れして見ていると、加藤さんから『ザイルをほぐして、奥山さんは真ん中でセットして』と言われ、あわてて言われたようにする。でも八の字結びはバッチリ覚えていた。最初にCLが（見ていると）いとも簡単に登って行った。先行組の後はいよいよ私達の番だ。緊張で手の平から汗が出てくるのがわかる。足がすくむという感覚がよくわかった。時間をかけて（私だけ）何とかクリアする事ができた。皆さんのお蔭です・・・。

2番目の岩場はザイルを垂らしてもらい何とか登る。その後もCLと加藤さんにザイルを繋いでもらい恐ろしい道を進んだ。蠟燭の様な岩が前方に見えてくる。見ようによっては、リズやプレーリードックが立っているようにも見えて面白い。その岩場をバックに写真撮影。モデルは高岡さん、小田さん、堀合さん。カメラマンのCLの注文がなかなか難しくモデルさん達は右往左往している。ようやく注文どおりの構図になったらしく？シャッターが切られた。

その蠟燭岩・（小天狗）を左に巻いて、ようやく・ようやく縦走路に出る。頂上へ向かって歩きだす。途中真教寺尾根隊と合流。感激の握手。A隊は踵を返して再び赤岳に登ってくれた。登頂。1時間遅れだった。山頂付近は賑やかで多くの人が昼食をとっていた。頂上に立った時、今までの赤岳とは全く違う感動があった。岩を登っていた時も恐怖で涙が出そうだったが頂上でもちょっと涙が出そうだった。（感激で）

足重く  
ライトに浮かぶ  
ホタン雪

登頂後、即下降開始。ツルネを目指す。キレット小屋迄ガレた道をひたすら下る。雪は全くない所あれば20cm位ある所もあった。キレット小屋前で小休止。どうやら此処から登りらしい。えー登るの？ともう少しで口に出しそうだったが、ぐっと飲み込む。ツルネ迄の道はわりと雪がある中の登りである。力を振り絞り登った。結構雪が降っている。下り始めた頃からちらついていて、どうやら本降りである。

ツルネ到着。ここで正規の縦走路と分かれる。木々についているエビの尻尾が凄く大きい。旗のように見えるものもあった。ツルネ東稜を下り始める。樹林帯の中を歩く。心なしか暗くなってきたような気もする。相変わらず雪はしんしんと降り続けているので、ちょっと前の人と離れると足跡が分からなくなってしまふ。前を歩く高岡さんを見失わないように歩くが、後の人とは随分間が開いてしまったようだ。樹林帯が笹藪になり、暫く歩くと沢らしきものが見えてきた。もうすぐだ。と思ったがなかなか着かない長い下りだった。

沢に出てアイゼンをはずす。が行きは無かったが、河原の石の上に雪が積もって歩きにくい。出合小屋で皆を待つ事にし小屋を目指す。小屋到着。雪は本格的になってきた。無線を入れてみるが応答がない。CLが『火でも起こすか』というので燃えそうな物を探していると、皆さんが下りてくるのが見えた。皆、元気そうで一安心である。全員集合し、車へ向けて出発。

河原の石の上には、うっすらと積雪がありその下は凍っている。気温は-3度。何度も転びそうになりながら歩く。周りは暗くなってきた上に雪がしんしんと降っている。もう幾つ堰堤を越えただろうか？まだかな？まだかな。と思いながら歩いていると、ふいに前方に車のライトが見えた。CLと加藤さんが先行し、私の車のヘッドライトを山に向かって照らしてくれていたのだ。『もうすぐだ』と最後の力を振り絞って光りを目指す。やっと車に到着。丁度朝、車を出発して12時間の行程であった。続々と皆到着。さすがに疲れ切った表情が多かった。

岩場で半ベソをかきながらも無事行ってこれで、車が見えた時は心底安堵しました。こんなに充実した1日を過ごしたのは久し振りで満足感、充実感で一杯です。今度は迷惑をかけないように頑張ります。

追伸 帰路、賛助会友の甲府の中沢さんのやきとり屋『すずめ』にてCL・大根田・高岡・山本勝・加トー・私で反省会。美味しいお酒を心ゆく迄いただきました。サイコーに美味しかったです。

1. 11月末、八つでこれ程の大雪は珍しい。横断道路ではスリップした車が慌ててチェーンをつけていた。
2. 町営『たかね荘』のキャンプ場はトイレ・風呂があり一人千円。
3. 隣の真教寺尾根と無線が入らず苦労した。
4. 先行1組2名。
5. 大天狗は赤岳沢側をまいた。